

# コロナ禍におけるTAPの取り組み及び展望への一考察

## —新しいアドベンチャープログラム様式を目指して—

The study of how TAP center endeavored to restart an efficient program and  
have a future perspective with practical research during the COVID19 pandemic:  
To focus on creating a “New Normal” of an adventure program

村井伸二

Shinji Murai

キーワード：新型コロナウイルス感染症、アドベンチャープログラム、ソーシャルディスタンス、  
ガイドライン、新しい生活様式

Keywords：COVID19, Adventure Program, Social Distancing, Guideline, New Normal

### 1. はじめに

「こんな状況を誰が予想しただろうか」このような言葉は新聞やメディアでも散々叫ばれ、驚きもなくなってきている。屋外では多くの人はマスクを着用し、飲食店などでは客と定員の間に透明のフィルムが貼られていることが違和感もなく目につくようになっている。一方で、「ウィズコロナ」「アフターコロナ」そして、「ニューノーマル」といった言葉が流行し、人々は新型コロナウイルスとどのように共存しながら生きていくかを予想し、模索しなければならない。また、新たなウイルスといった将来の敵に備えていくことも、今回の新型コロナウイルス対策から学んでいくこととなろう。

新型コロナウイルス感染者（COVID19）は2020年11月9日現在で10万人に達した（NHK）<sup>1)</sup>。さらに、世界での感染者となると5000万人を超えて（日本経済新聞）<sup>2)</sup>日々感染者が増加している。医療体制を安定させながら、経済をまわすといった世界共通の課題に対して、我々一人一人の地道な努力として、様々な対策を講じていかなければならない。

また、コロナ禍の中、学校の一斉休校が2月28日から実施された。大学においてはオンライン授業が主流となり、新1年生は登校が数回しかできていないという現状がある。

TAPでは、アクティビティを活用した身体活動を伴うローチャレンジコースでの協力、信頼関係の構築を目指す。そして、ハイチャレンジコースでのグループメンバーのサポートを得ながら、高所でのチャレンジを促していく。また、チームチャレンジコースではグループメンバー全員が高所で助け合いながら課題を解決することが真骨頂であるにもかかわらず、コロナ禍で活動ができなくなった。

しかし、世界ではさらに過酷な状況においても前進し、オンラインプログラムを構築しながら対面であるプログラムに備えている姿があった。その姿に新しい生活様式である「新しいアドベンチャー様式」を想像し、改めて新型コロナウイルスに対抗するプログラムを開発し、引き続き

コロナ対策及びアフターコロナについて考えていかなければならない。

本稿はこの未曾有の世界的課題におけるコロナ禍の日本の状況、特に大学の対策を振り返りながら、TAPセンターの取り組みとして、今年度の事例を報告としてまとめる。さらに、来年度のプログラム実施に向けての対応策及び今後のアフターコロナに向けての実践研究の展望も述べていきたい。

## 2. 新型コロナウイルスにおける大学としての対策

様々な新型コロナウイルス対策が国の政策としてなされ、高等教育においてもその影響を受けている。ここでは文部科学省の発表及び玉川大学の決定事項を踏まえながら、大学のコロナ禍対策を紹介する。以下、文部科学省及び玉川大学の発表内容を表に記す（表.1）。

表.1 文部科学省及び玉川大学の通知及び発表内容

	日付	通知・発表	内容
文部科学省	2020年4月6日	「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」 <sup>3)</sup>	大学のオンライン授業を実施する。
玉川大学	2020年5月28日	「緊急事態宣言の全面解除を受けての本学春学期授業について」 <sup>4)</sup>	3密回避、通学時の感染防止を考慮して春学期はオンライン授業とする。
文部科学省	2020年7月27日	「本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について」 <sup>5)</sup>	面接授業の実施の検討及び困難時は遠隔授業を実施する。
玉川大学	2020年8月19日	「令和2年度 秋学期の授業について」 <sup>6)</sup>	実験・実習等、1年生少人数科目、4年生少人数演習科目、そして大学院を対象に対面授業を実施する。

TAPセンターは春学期当時では、秋学期以降は対面授業と共にTAPの実施再開を目指していた。しかし、秋学期も困難であると判断され、オンライン授業と対面授業の併用という形になり、TAPとしてのプログラム再開は見送られることになった。この状況をポジティブに一部対面授業の併用となったことは少しずつ前進していると捉え、コロナ禍におけるTAPの可能性が少し見えてきた時期でもあった。

## 3. 事例から見るコロナ禍でのTAPとしての対策（2020年4月～7月、春学期）

TAPセンターでは「TAPファシリテーションⅠ」（実践）「TAPファシリテーションⅡ」（理論）という授業を開講している。春学期の「TAPファシリテーションⅠ」はオンライン授業での実施となった。

ここでは春学期の「TAPファシリテーションⅠ」の取り組みについて報告しながら、オンライン授業におけるファシリテーションについて、事例を踏まえて考える。

今回のオンライン授業では、TAPの醍醐味である身体活動を伴いながら、協力や信頼関係を構築することが困難であることは明らかであった。しかし、オンライン授業の強みは何か、それは「コミュニケーション」である。

つまり、アクティビティにとらわれることなく、パソコン上の学生一人一人の良いところを活かしながら、個のコミュニケーション能力を活用して関係性を構築していくことに注目した。さらに、「オンラインにおいて学生の要求を尊重し、強勢されるのではなく、自らの参加を強いることを選択してもらうことが重要（チャレンジバイチョイス）（Adventure WV）」<sup>7)</sup>とあるように、TAPが大事にしている心と体の安全をオンライン授業でも心掛け、学生同士、学生と教員が双方で積極的に参加できる安全な環境を作り上げることに集中した。

身体接触を伴う活動に勝ることはなく、信頼（トラスト）やチャレンジコースを使った体験のインパクトを獲得するまでには、オンライン上限界があった。しかしながら、授業を重ねていくことで、学生同士の雰囲気も徐々に良くなっていった。そして、オンライン授業も後半に差し掛かり、そろそろ振り返りをしていくころだと考えていた。

そこで、ある写真を並べながらストーリーを作るという活動（Web会議システムのZoomではなく、アクティビティのZoomを模したもので様々な絵からつながりをみつけていく。）を提示したときであった。学生たちが楽しそうにお互いが意見を出し合い、グループの盛り上がりが見えてきたその時、一人の学生の表情に気が付いた。著者はファシリテーターとして、学生たちが積極的に活動に参加していたにもかかわらず、TAPで言う“Have fun”の度が過ぎ、「ふざけ」に近いものになりつつあるのではないかと感じていた。活動の途中で介入をし、「何か今、感じている人はいるかな？」との質問に、表情が気になっていた学生は「私は楽しくないと思っている。」と正直に他の学生に伝えた場面があった。その言動により、他の学生たちは自分らが楽しんで活動を行っていると思い込んでいた。

しかし、実は「全員で活動に取り組んでいない」ことを振り返ることにより、学生たちが気づきを得たのである。オンラインZoomでのファシリテーションにおいて、質問などを通じて体験を振り返ることはとてもパワフルな道具となりうる（Unity Effect）<sup>8)</sup>とあるように、対面やオンラインであろうと体験を通じた振り返りというものが、気づきや学びを促進することは確かである。

ただし、オンライン授業には課題もあった。それはデジタルのテクニカルな部分である。当初は慣れないZoomに戸惑いながら、間違えてミーティングそのもののものを消去してしまったこともある。様々なトラブルに対して学生たちの方から援助をもらいながら、経験を重ねていった。また、複数の学生が同時に話しをした時には一人の声がかき消され、もう一度発言をお願いし、“Teachable moment”（教育的な好機）ととれる、その瞬間を逃さないようにオンライン上で苦勞を要した。

様々な活動を取り入れ、学生たちの援助もありながら、15回のオンライン授業を実施することができた。新型コロナウイルスといった環境でなければ、このような経験はできずにいただろう。今現在、秋学期であるが、「TAPファシリテーションⅠ」は引き続きオンライン授業となっている。今後、15回全てがオンライン授業の形態は、来年度以降のコロナ禍の改善に伴い、以後実施されないと予想される。このことから、その体験の貴重さに気づいたのである。

#### 4. コロナ禍でのTAPとしての対策（2020年10月～現在、秋学期）

TAPセンターは大学やK-12といった学校教育だけでなく、企業を対象にした研修を請け負っており、主に大学内で研修を行う「On Campus」と、出張形態を取り出向いてプログラムを行

う「Off Campus」の大きく二通りがある。TAPセンターは大学附置機関であり、上記した大学の規定に従うと判断したため、秋学期も大学内では引き続きプログラムが困難であると考え（玉川学園K-12を除く）。しかしながら、出張扱いとしての「Off Campus」であれば、国内移動の制限がないことで、プログラムが可能となった。そこで必要となったのが「Off Campus用ガイドライン」である。特にTAPは身体活動を伴う接触が多く、コミュニケーションが必須となるプログラムである。春学期の授業のように、オンラインという状況ならば問題はないが、実際に対面であり、しかもアクティビティを含んだ安全対策を伴うプログラムについて検討する必要があった。

スタッフが協力して情報収集に尽力し、文部科学省や東京都教育委員会などのコロナ禍でのガイドラインに目を通しながら、TAPのガイドライン作成に着手した。学校教育や当大学のガイドラインも確かに重要な情報源だが、これらのガイドラインは基本的には教室内での講義指導が中心であり、一部対面授業の情報もあるが、TAPのような身体接触を伴うグループワークとは異なり、適格に該当する内容とは言えなかった。この時にとても参考になったのが、様々な組織や団体における迅速なるガイドラインの作成であった（表.2）。

表.2 野外・環境関連団体のガイドライン

発表日	団体名	ガイドライン名
2020年5月27日	個上社団法人日本環境教育フォーラム NPO 法人自然体験活動推進協議会 一般社団法人日本アウトドアネットワーク	「自然体験活動・自然教育・野外教育・環境教育を実施している事業体（以下：自然学校等）における新型コロナウイルス対応ガイドライン（第1版）」 <sup>9)</sup>
2020年6月18日	日本キャンプ協会	「アメリカキャンプ協会策定「キャンプ運営ガイドライン（日本語版）」」 <sup>10)</sup>
2020年6月26日	日本環境教育学会	「新型コロナウイルス感染症（COVID19）に対応した環境教育活動に関するガイドライン（ver.1）」 <sup>11)</sup>

一方、海外においては、アドベンチャープログラムを取り入れている大学がCOVID19対策のガイドラインをホームページ上に掲載しているのを発見し、「チャレンジコース使用におけるグループサイズを小数にすることや、他のグループとの用具の共有をしない」といった内容が記載されていた（University North Carolina Charlotte）<sup>12)</sup>。世界のアドベンチャー教育者は困難な状況でありながらも、努力を惜しまずプログラム再開を目指していた。さらに、情報収集を続ける中、TAPとしてプログラムのアイディアや理念・手法などを参考にしているProject Adventure, Inc. はCOVID19対策のワークショップがオンラインで開催していた。

そこで、著者は「Challenge Course Operations: COVID Risk Management Virtual Roundtable」<sup>13)</sup>に参加した。このワークショップにはアメリカ全国からプログラムを再開させたいが、「何に気を付ければいいのか」などの疑問を持ったアドベンチャー教育者が参加していた。主催者側のインストラクターの資料提供と共に積極的な議論が行われた。COVID19の受け取り方や対策は一つの方法だけでは不十分であること、スクリーニング（健康に関する調査）、ソーシャルディスタンス、マスクの着用、衛生、そして、安全な環境などを併用して実施することが重要であることを理解した。

このように、情報収集といったスタッフの努力を経て「Off Campus用ガイドライン」が完成した。このガイドラインが作成されることにより、TAPのスタッフ間において、さらに一歩前に



進んでいく姿勢が感じられてやまない。とにかく、できないと立ち止まるのではなく、何ができるのかを考えながら前に進んでいく。すなわち、「アドベンチャー」を実践しているのだと実感できたのである。

このガイドラインのお陰で11月現在、1校の中学校及び1つの企業へのプログラム実施が可能となった（これ以降も数件の企業の予約をいただいている）。主張先となる依頼主にも組織としてのガイドラインが存在する。それに対してTAPは双方のガイドラインを事前にすり合わせ、コロナ禍ではまず、参加者の安全が確保されることが大前提となった。このことにより、コロナ前のプログラムと比較して大幅な変更を余儀なくされた。ここではコロナ前とコロナ禍での対策プログラムとして比較したものを表に記す（表.3）。

表.3 コロナ前とコロナ禍の「Off Campus」プログラムの比較の例

対象	コロナ前	コロナ禍
中学校	中学校の体育館において約120名4クラスを2クラスに分け2時間分（50分×2回）を実施した。	中学校の体育館に1クラスごと（スペースと人数との配慮）1時間（50分）5クラス分5回を実施した。
企業	2日間の地方での合宿プログラム。1日目の午後と2日目の午後にプログラムを実施していた。	都内の施設（移動の制限）で1日プログラムとし、午前、午後の入れ替え（少人数での活動）で実施した。

依頼先においては以前からTAPの経験があり、更なる関係を構築しながら、双方がコロナ禍でプログラムを実施する上での条件を出し合った。このことで、「やらない」と捉えるのではなくポジティブ思考により、いかにしてプログラムを実施していくかに重きをおいたことが、解決策であったのではないかと考える。つまり、TAPで普段からプログラムで提示している「課題解決」がコロナ禍に一般化され、プログラム実践再開の一步として実を結んだのではないかと捉えられる。

## 5. 今後のTAPにおけるコロナ対策の展開

ここまで新型コロナウイルスの対策の経緯と共にTAPの対策や取り組みについて報告してきた。ではこれ以降、新型コロナウイルスの収束は未だ予想できない中、TAPは何を社会に提示し、どう行動に移していけばいいのだろうか。引き続きコロナ禍での注意喚起であるソーシャルディスタンス、3密の回避、消毒の徹底、そしてマスクの着用は実施されることは必須となる。今までのTAPの大学授業、及び「Off Campus」のプログラム経緯として、オンラインのみ→オンラインと対面の併用→注意喚起をしながらの対面（オンラインも含む）を鑑み、TAPでは来年度からはチャレンジコースを活用した「On Campus」実施に向けての「On Campus用ガイドライン」作りにシフトしていかなければならない。ここではTAPが所有するチャレンジコースを活用しながら、コロナ禍での安全な対策案について考えていきたい。

ソーシャルディスタンスとマスクの着用を上手に併用させることで、更に安全な活動を展開できると考える。屋外においての活動では2mを離れて確保しながら活動を行う。しかし、活動に

においては故意にではなくとも、ソーシャルディスタンスが2m－1mといった距離になってしまうことがある。Project Adventure, Inc.の資料によれば「2mよりも近づいた時（一定時間）でもマスク着用をしていれば感染を予防することができる」（Project Adventure, Inc.）<sup>14)</sup>とあり、このような新型コロナウイルスの理解はプログラム計画においてとても重要となる。

コロナ禍でのプログラム中、ファシリテーターとしてはアクティビティの選択が困難となる。アクティビティを選択する際の考え方として、ソーシャルディスタンスを確保しながら可能なアクティビティを選択し、さらにGRABBSS評価も活用しながら提供していく。つまり、ファシリテーターはソーシャルディスタンスを実施した上に、限られたアクティビティを即座に選択していかなければならない。

ここではコロナ禍のアクティビティに対する捉え方についていくつか紹介する（表.4）。

表.4 コロナ禍のアクティビティの工夫例

種類	アクティビティ	コロナ禍での工夫
アイスブレイキング	ハブキューエバー、ラインアップ（情報収集）、タグ（ウォーミングアップ）	通常よりも距離（2m－1m）を確保すれば活動が可能である。
協力アクティビティ	2人組のハンドクラッピング（ビート）	距離（2m－1m）を確保し、手を叩かずには拍手などを活用してリズムを変える。
課題解決	パイプライン	通常のパイプをつなげるなどして長くすることにより人との距離（2m－1m）を確保することができる。

このように、コロナ禍では創意工夫をすれば、活動は可能なものへと変化しうると考える。それにはしっかりとした新型コロナウイルス感染症の知識を得ながら、参加者にとって最適なアクティビティを選択し、創意工夫を行いながら有意義なプログラムにしたいものである。

ここではチャレンジコースのコロナ禍の対策について以下、記す（表.5）。

表.5 チャレンジコースのコロナ禍の対策

コース	コロナ禍の対策
ローチャレンジコース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホエールウォッチングを少人数設定で行う。</li> <li>・デンシオントラバースやニトロクロッシングは個人での活動とし、ソーシャルディスタンスを確保しながら活動する。</li> <li>＊状況を踏まえた正確なスポッティングが必要</li> </ul>
ハイチャレンジコース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・参加者2名で行っていたエレメントは1名で実施する（キャットウォーク、カーゴネット、クライミングウォールなど）。</li> <li>・チームビレイはファーストビレイヤー（メインで確保する者）、セカンドビレイヤー、サードビレイヤー、アンカーをソーシャルディスタンスで実施する。アンカーはテザー（ロープ）を活用して安全を確保する（図1）。</li> </ul>
チームチャレンジコース	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループを少人数とし、ライフライン（参加者自身が確保できるハーネスと接続されたロープ）を各自が持ち、ソーシャルディスタンスを確保しながらの実施（図2）。</li> <li>＊ステーション（参加者が昇り降りする場所）やデッキ（エレメント間の接続部分）では参加者同士が至近距離になる恐れがあるので、ファシリテーターは安全に配慮し、誘導する。</li> </ul>

マスク着用は有効な感染予防の手段であるといわれるように、活動においてもとても重要なアイテムであるといえる。基本的に参加者にはマスクを持参してもらい、着用を促す（TAPセンターでは予備としてマスクを用意している）。季節においては熱中症が考えられるので、安全を確保しながら外してもらうなどの対処は必要である（スポーツ庁「学校の体育の授業におけるマスク

着用の必要性について」(2020年5月21日)<sup>15)</sup>。

しかし、ハイチャレンジコースでの参加者は、高所において一人の活動となるので、マスクを外しても良いのではないかと考えている。無理をして高所でマスクを着用させれば、緊張が原因となる過呼吸などを引き起こしてしまうかもしれない。

一方で、チームチャレンジコースにおいてはマスクの着用を促したいと考えている。なぜならば、小グループ全員が高所に上がり、個々での動きになるが、いつ至近距離になるかは予想できない。先ほどのハイチャレンジコースと同様に、高所でのマスク着用で呼吸が苦しくなる可能性がある。この安全対策においては、どれだけチームチャレンジコースの活動前に参加者の不安を取り除き、挑戦する意識を高めることができるかが重要になってくる。

ここで特筆したいことは、コロナ禍だけでなくアドベンチャープログラムにおいて、「チャレンジコースは必ず使わなければならないというものではない」ということである。しかし、今後コロナ禍では難しいとされるチャレンジコース使用をあえて安全対策を講じていくことで、「新しいアドベンチャープログラムの様式」において、コースの活用はコロナ対策の象徴となり、本来のねらいである個と集団の学びと成長を更に支援できるのではないかと考えている。

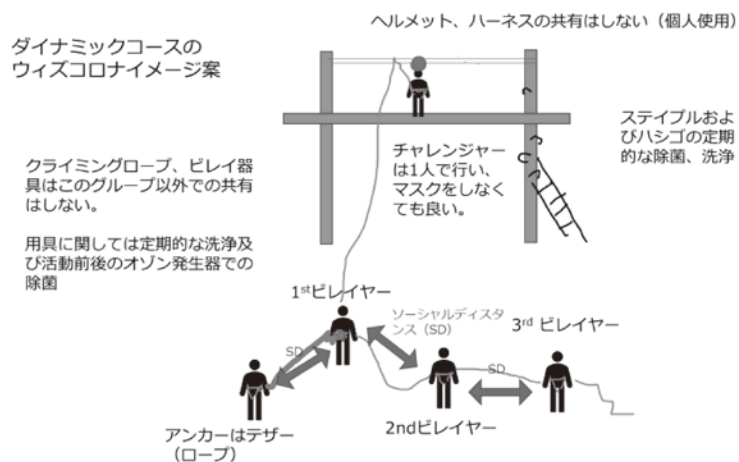


図.1 ダイナミックコースのウィズコロナ案

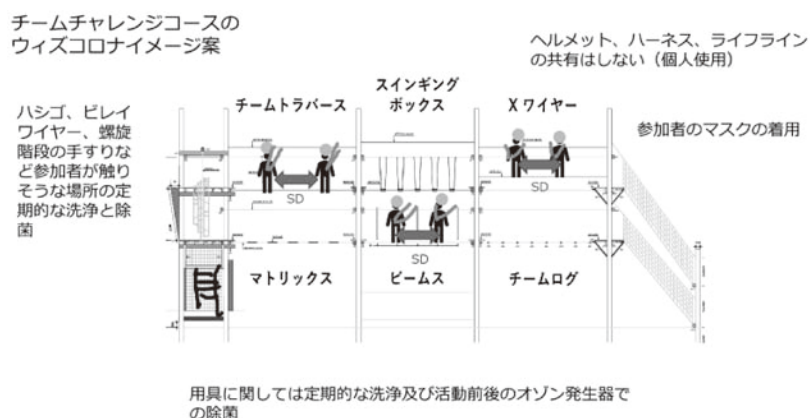


図.2 チームチャレンジコースのウィズコロナ案

## 6. アフターコロナに向けての実践研究

本稿の最後として、アフターコロナに向けてTAPの今後の展開を考えていく。これからのプログラムはコロナ前と同じにはならないかもしれないが、それをあえてメリットとして捉えながら、プログラムに反映していくことはできないだろうか。それにはアフターコロナに向けたTAPの実践研究が必須になってくる。アフターコロナに向けては先行研究を踏まえ、実践研究を実施し、様々な対策を検討していかなければならない。

Alawamlehら（2020）はコロナ禍において、ヨルダン大学生133名を対象にオンライン授業と対面授業の比較調査を実施した。結果、オンライン授業にとっても満足、満足と回答したのは47.3%であった。また、通常の対面授業とオンライン授業のどちらを好むかに対して、対面授業に答えた学生が78.2%であった。さらに、オンライン授業の利点として心地よさや移動時間の短縮などを挙げているが対面授業の方がより相互作用があるとしている<sup>16)</sup>。

この先行研究の結果は春学期に実施した「TAPファシリテーションⅠ」の学生の振り返りの中で、対面授業がより有効ではないかといったニュアンスが含まれるものもあった。これらの結果は、アフターコロナへの対策を予見しているのではないかと捉えている。なぜならば、コロナ禍ではオンライン授業はやむを得ずの策であったが、将来はオンラインと対面とが選択できるようになる。どちらかの方法に偏ることなく、バランスよく適正に、お互いのメリットを統合することが重要であることが示唆されている。

一方で、コロナ禍における環境・野外教育の実践研究を行ったBeery（2020）はスウェーデンの大学生を対象に遠征実習を行う上で、冬から春にかけてはオンライン授業で学習し、Pre実習と本実習を夏に実施したことについて報告した。参加した大学生はコロナ禍での実習を通じた実体験から、COVID19に対する危機意識が高まったことを示唆している<sup>17)</sup>。この先行研究は長期的に計画された遠征型の実習となるために、TAPが行う授業やプログラムとは異なり、国の状況も配慮しなければならない。しかし、強調したい点は、オンライン授業と実習といった体験学習を適切に併用していくことで、コロナ禍といった困難な時期において、安全な実践の可能性が述べられたことである。

コロナ禍において我々は日々の情報や対策を経験しながら今を生き抜いている。しかしながら、アフターコロナは未知の領域となる。この先々の困難に立ち向かっていくためには実践研究として、我々が得られる事例と多数のエビデンスを用いて検証し、今後に備えていく必要があると強く考えている。コロナ後について角幡（2020）は「きっとこれまでと同じ日々が続くと期待できるからこそ、人は心安らかに暮らすことができる。逆にその予定調和的日常に飽き足りなさを覚えたから、私は非日常的な探検行を志向する。」<sup>18)</sup>と述べているように、我々もこのコロナ禍だからこそ「アドベンチャー」という探検行を引き続き試みながら、アフターコロナに備えていくべきだと考える。

今後近い将来、コロナ前と同じであるとは言わないが、大勢の方々とアドベンチャープログラムを通じて実際に手と手を取り合いながら、お互いの達成感を分かち合いたいものである。このような状況を逆にとり、「こんな状況を誰が予想しただろうか」と参加者同士が喜び合う日がそう遠くないことを信じてやまない。本当に待ち遠しい限りである。



## 【引用・参考文献】

- 1) NHK NEWSWEB「【国内感染】9日12人死亡 782人感染確認（午後10時半）」<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201109/k10012703101000.html>（参照日2020年11月9日）
- 2) 日本経済新聞「感染者、世界で5000万人 コロナ禍が広がる医療格差」<https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/coronavirus-infections-50million/>（参照日2020年11月9日）
- 3) 文部科学省「大学等における遠隔授業の実施に当たっての学生の通信環境への配慮等について（通知）」2020年4月6日 [https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt\\_kouhou01-000004520\\_5\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200407-mxt_kouhou01-000004520_5_1.pdf)（参照日2020年11月9日）
- 4) 玉川大学「緊急事態宣言の全面解除を受けての本学春学期授業について」（2020年5月28日）<https://www.tamagawa.jp/university/introduction/2020covid-19.html>（参照日2020年11月10日）
- 5) 文部科学省「本年度後期や次年度の各授業科目の実施方法に係る留意点について」（2020年7月27日）[https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200727-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)（参照日2020年11月12日）
- 6) 玉川大学「令和2年度 秋学期の授業について」（2020年8月19日）<https://www.tamagawa.jp/university/introduction/2020covid-19.html>（参照日2020年11月12日）
- 7) University West Virginia, Adventure WV Resource Toolbox for Online Group Engagement & Instruction file:///C:/Users/mucch/Downloads/AWV%20Virtual%20Resource%20Guide%20-%20SRTI%20(2).pdf（参照日2020年11月12日）
- 8) Unity Effect *How to facilitate engaging online meetings with Zoom* <https://medium.com/@unityeffect/how-to-facilitate-engaging-online-meetings-with-zoom-3cc94c1cab89>（参照日2020年11月12日）
- 9) 公益社団法人日本環境教育フォーラム、NPO法人自然体験活動推進協議会、そして、一般社団法人日本アウトドアネットワーク「自然体験活動・自然教育・野外教育・環境教育を実施している事業体（以下：自然学校等）における新型コロナウイルス対応ガイドライン（第1版）」<https://www.jeef.or.jp/wp-content/uploads/2020/05/1bfefc6b2f70dcf7d54d4d0b3667e7f1.pdf>（参照日2020年11月10日）
- 10) 日本キャンプ協会「アメリカキャンプ協会策定〈キャンプ運営ガイドライン（日本語版）〉」<https://camping.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/06/%E3%80%8CCamp-Operations-Guide-Summer-2020%E3%80%8D%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%89%88.pdf>（参照日2020年11月9日）
- 11) 日本環境教育学会「新型コロナウイルス感染症（COVID19）に対応した環境教育活動に関するガイドライン（ver.1）」[https://jsfee.jp/images/general/ee\\_guideline\\_june2020.pdf](https://jsfee.jp/images/general/ee_guideline_june2020.pdf)（参照日2020年11月10日）
- 12) University North Carolina Charlotte, Venture Outdoor Leadership <https://venture.uncc.edu/team-building-updated-covid>（参照日2020年11月13日）
- 13) Project Adventure, Inc. *Challenge Course Operations: COVID Risk Management Virtual Roundtable* Challenge Course Operations: COVID Risk Management Virtual Roundtable <https://www.workshops.pa.org/all-workshops/p/covid-risk-management-virtual-roundtable>（参照日2020年11月5日）
- 14) Project Adventure, Inc. *FREQUENTLY ASKED QUESTIONS RELATED TO COVID 19* file:///C:/Users/mucch/Downloads/PA%20Frequently%20Asked%20Questions%20v3%209.2020%20(4).pdf（参照日2020年11月14日）
- 15) スポーツ庁「学校の体育の授業におけるマスク着用の必要性について」（2020年5月21日）[https://www.mext.go.jp/sports/content/20200522-spt\\_sseisaku01-000007433-1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/20200522-spt_sseisaku01-000007433-1.pdf)（参照日2020年11月15日）
- 16) Mohammad Alawamleh, Lana Mohannad, Al-T wait and Gharam Raafat, Al-Saht *The effect of online learning on communication between instructors and students during Covid-19 pandemic* 2020, Asian Education and Development Studies
- 17) Thomas Beery *What We Can Learn Environmental and Outdoor Education during COVID-19: A lesson in Participatory Risk Management* Sustainability 2020, 12, 9096
- 18) 養老孟司、ユヴァル・ノア・ハラリ、福岡伸一、ブレイディみかこ、ジャレド・ダイヤモンド、角幡唯介ほか『コロナ後の世界を語る—現代の知性たちの視線』2020年、朝日新聞社、p. 43